

The Three Taps
1927
by Ronald A.Knox

目次

三つの栓

5

訳者あとがき

253

解説 真田啓介

256

主要登場人物

- マイルズ・ブリードン……………インデイスクライバブル保険会社の探偵
アンジェラ・ブリードン……………マイルズの妻
リーランド……………スコットランドヤードロンドン警視庁の警部
モットラム……………資産家の老人
ブリンクマン……………モットラムの秘書
シモンズ……………モットラムの甥
パルトニー……………教師。(災厄の積み荷)の泊り客
司教……………ブルフォード司教区の司教
イームズ……………司教の秘書
デイヴィス夫人……………(災厄の積み荷)の女主人
エメリン……………(災厄の積み荷)の女中

三つの
榼

第一章 安楽死保険

保険の原理は、アングロサクソン時代にはすでに一般に知られていたらしい。混乱と無秩序のさなか、いかなる方法により、火災、水害、盗難、その他の災害を保障する事業を営むことができたのか、歴史家にとってはいまだに謎となっている。また、この仕事に初めて数学的計算を取り入れたのが、一七世紀オランダで辣腕を振るった政治家、ヤン・デ・ウィットであるという事実も、なかなか興味深い。いずれにしても、現代では、綱渡りのような暮らしの下に各保険会社が金色の網を張りめぐらせている。人生にあたりはずれがあるとしても、賢明な人間なら、どちらに転んでも安心なように備えておくからだ。この考えが遙か昔から十分に理解されていれば、アルフレッド大王にキーキを焦がされたからといって農家のおかみさんが大騒ぎをする必要はなかったし、ジョン王がウォッシュの浅瀬で失った積み荷もすべて速やかに補償されたことだろう。人類の英知に感謝しよう。それこそがこうして、わたしたちの苦痛や悩みを押し流す水路を切り開く手段を見つけてくれたのだから。同時に、保険料は書類に指定された期日までにきちんと収めよう。身に災難が降りかかってから慌てるのでは遅いのだ。

もつとも、ある意味、インデイスクライバル社が出現するまで、保険は単なる経験科学に過ぎなかった。インデイスクライバル社の保険に入った者は、堅固な鎧を身に着けて世の中を歩くような

ものである。聖者にとつては精神的糧の源となる不利な事故や屈辱が、保険加入者には物質的利益をもたらず。東風に晒されて風邪をひいても、保険金がおりとすれば楽しいし、道端に落ちていたバナナの皮ですべっても、転んだ先に富が待っているなら文句はない。インディスクライバブル社の特許品である自動産卵記録器を鶏舎に設置した養鶏業者は、絶対に倒産しない。卵は産まれるが早い穴から静かに落下し、その際、タクシーメーターのような機器に個数が記録される。そして、月末の卵の総数が平均以下ならば、その差額を社が支払う——あるいは産み出すと言ったほうがいいかもしれない——わけである。こうして社は雌鶏役を引き受け、場合によっては同様に、蜜蜂を装うこともある。社の代理人の面前で巣箱が開けられると、空の巣室が残らず蜜でいっぱいになるといふ具合に。もちろん費用は会社持ちだ。医師たちは健康保険患者の超過に、弁護士たちは訴訟件数の不足に備え、保険に入る。つまり、この世ではあらゆる物事に保険をかけることができるのだ。しかし、あの世へ行く際にかげられるような保険があるとしたら、これほどすばらしいことはない。世間ではいくつかの困難さえ克服されれば、必ずやインディスクライバブル社があつた世へ通じる道を開いてくれるものと信じている。また、強盗なら盗んだ宝石の山が偽物だつた場合のために、牧師なら夕べの祈りの参加人数が不十分だつた場合のために保険に入ることができると、社の出費をだしに軽口を叩くお調子者もいる。彼らの話によれば、ある顧客はエレベーターの昇降路に落ちたときに「ありがたや！」と呟いたそうだし、救命具をつけて漂流すると一分につき十ポンド支払われる保険に入っていた客は、遭難した際、駆けつけた救助に対してあからさまな苛立ちを示したという。つまり、インディスクライバブル社はわれわれが持つ価値観の尺度を根底から覆しているのだ。

しかし、この会社の取扱商品のうちで、重要さと人気において他の追隨を許さないのが、いわゆる

安楽死保険である。この商品を世に出した偉大な頭腦の持ち主は、人間のあてにならない運命を、同情の念をもって観察した。いかに実業家が汗水たらして働き、必死に努力したところで、その勤勞の成果を彼自身が手にできるのか、それとも彼の氣に入らない相続人の手に渡ってしまうのか、答えは定かでない。だとすると当然、保険統計の見地から、早死と予想外の長壽、両方の可能性に対処する保険が必要になってくる。もっとも、受取額が大きいのは早死した場合である。言うまでもないが、安楽死保険に加入すれば、極めて多額の保険料を支払うことになる。しかし支払いにあたっては、いささかの不安も感じることはない。もし六十五歳になる前に死亡した場合、富は直ちに相続人や受取人に譲渡される。その重要な年齢を乗り越えれば、それ以降は、自然の掟がゆるゆると発令されるまで、社から年金を受給する身となる。老衰の最後の段階においても、はかない呼吸のひと息ひと息が金となる。相続人や受取人は、解放の瞬間を無慈悲に待ち望んだりせず、現代医学の料を尽くして延命を試みる——そうするのが彼らの利益になるからだ。ひとつだけ、せっかくの利益を失う場合がある。それは自殺をしたときだ。わたしたち人間はとても複雑にできているので、そのような手段で生き残った身内を豊かにしようという誘惑に駆られないとも限らない。安楽死保険の契約条項の一番下に、自殺の場合は法的にいかなる利益も払い戻さないという注意書きがあり、これを不気味な黒い手のカットが指し示しているのも、そういう理由からだ。

インデイスクライバブル社の社屋がロンドンでも有数のものであることは言を俟たない。近代的かつアメリカ式の流儀で事業を經營する立場からすると、あらゆる業務が、その大きさや壮麗さにおいてタージ・マハルにも劣らぬ大建造物の中で遂行されるのでない限り、効果は得られないということだろう。なぜそうあるべきなのか、これを説明するのは難しい。容易に物事を信じられない昨今、こ

んな大金がどこから出るのだろうと訝らずにいられない向きもあるかもしれない。もし社の建物がこれほど高くなければ、こちらが支払う保険料ももう少し安くなるのではないか。考えてみれば、弁護士にも粗末で薄汚い小部屋に住む者はいる。絨毯は擦り切れ、壁にはいつからとも知れぬ蜘蛛の巣が張っているが、彼らがこのみすばらしさのために信用を失うのではと感じることがあるだろうか。答えは明らかに否である。それでもなお、近代的な保険会社としては、宮殿のように豪華な社屋を通して、その背後には莫大な資産が蓄積されているという印象を世間に植えつけねばならないのだ。東方の専制君主がいかに贅の限りを尽くしたところで、その建築構想の壮大さにおいては、抜け目なく効率を追求するアメリカの実業家にはかなわない。このような殿堂の一室で談笑を交わすとしたら、かのアッシリア王サルダナパルスは自分の敗北に気が滅入ると抗議するだろうし、モンゴル皇帝フビライは、非の打ちどころのない建物だがつろげないと文句をつけるだろう。

インディスクライバル社の社屋は、細長い窓の連なるさまがエジプトの墳墓を思わせる高層ビルディングである。当然、白大理石が使われていて、あまりに荘厳な外観を呈しているため、それがただの鉄の大梁からなる巨大な枠組みでしかなかった建築途中のことなど、思い出すだけでも冒瀆に思われるほどだ。正面玄関の扉の上には等身大を超える群像の浮き彫りが見える。主題は明らかに、やもめ暮らしの女の涙を拭ってやる気前のよい男と思われるが、ブリタニア(英国を擬人化した女神)からすりを働くアンクル・サム(典型的アメリカ人)の姿だと見なした不敬な輩もいる。こうした群像が外壁の装飾帯に彫り込まれ、建物の四面をぐるりと取り囲んでいるのだが、見る者に、人間が遭遇せざるを得ない無数の危険を思い起こさせるよう、巧妙な工夫が凝らされている。そちらに描かれている交通事故の場面では、救急車が大量の負傷者を運び去っている。こちらは紛れもなく難破船だ。あちらでは猛獣狩りの

男が決然たる面構えのバッファローに角で突かれ、背後ではライオンまで思わせぶりに徘徊している。屋内の様子については、あまり確信をもって語ることはできない。何しろ、社の顧客として手厚くもてなされている人々ですら、五階から先には行ったことがないようなのだ。しかし噂では重役たちのためのビリヤード室があると聞く。もつとも彼らがそこに足を向けることはないらしい。暑い日などは飛行機から、屋上で社員たちがテニスをしているのが見える。彼らがテニスをしていないときに何をしているのか、あるいは、六階、七階、八階にある数えきれないほど多くの部屋がどんなふうに使われているのか、ちよつと考えただけで想像力が麻痺しそうだ。

一階にある待合室の一室で、大きな棕櫚の木の下に座り、《保険と船舶》の記事に読みふける顧客の姿があつた。読者諸氏にはぜひこの人物に注意していただきたい。これから始まる物語は彼とおおいに関わりがあるからだ。その容姿、服装、態度物腰から彼を金持ちだと見抜けるのは、地方の小都市を頻繁に訪れる機会があり、そうした地域ではいかに金と教育とが無縁かを知る者のみである。幅広いの長い折り襟がついた短い黒のコート、糊のきいた旧式のカラー、ダブルのチョッキ、そこからぶら下がった数々の紋章やロケット、チャーム——ようするに、ロンドンでは、まずまずの収入のある、古風な銀行の出納係といったところだ。だが実を言えば、彼は人を現在の職から二倍の給料で引き抜くことができるのだ。しかも、いとも軽々と。イングランド、中部地方ミッドランズの大きな町ブルフォード。よほどの用事がなければ訪れるような場所ではないが、少なくともその地においては、彼は住民の誰もが認める町一番の金満家なのである。インデイスクライバブル社の待合室にいる彼は、小遣い銭をもらう順番を待つ子どものように見えるし、本人もそう感じている。しかし、そばで《保険と船舶》のバックナンバーを揃えている社員にとつては、馴染みの顔だ。なぜなら、出生の巡り合わせでモット

ラムと呼ばれ、両親の悪趣味によりジエフサ（旧約聖書の登場人物。請願を守り、ひとり娘を犠牲にした）と名づけられたこの男は、安楽死保険の加入者だからである。

別の社員が近づいてきて、予約していた面会の用意ができたと告げた。こんなとき、歯医者者の待合室のように、「モットラムさん、どうぞー」などという声が派手に響き渡ることは決してない。インデイスクライバブル社では、社員が客の傍らまで来て、そっと囁き、誘うのが流儀なのだ。モットラム氏は立ち上がり、エレベーターで速やかに三階まで運ばれていった。そこにはまた別の社員が数人待ち受けていて、重要な話をする部屋に案内した。ここで彼を迎えたのは、感じのよい、どこか物憂げな雰囲気のある若手社員だった。神経の行き届いた身なりをして、ひと目で大学出だとわかるが、インデイスクライバブル社における複雑な階級のなかで彼がいかなる地位にあるのかは、ここで決めるべきことではない。

「いかがですか、モットラムさん。お変わりないでしょうね」

モットラム氏は彼の町の住人と同じ不愛想な態度で、都会風の洗練された会話に乗ろうとはしなかった。「ああ、変わらんとも」彼は言った。「あなたにとつては、わしが元気であるのが何よりなんだろう、え？ その点では、わしとあなたで争うことはない。さて、驚かせるかもしれないが、今日、あなたと話したのは、わしの健康のことだ。わしは病気には見えんだろうか？」

「お元気そのものに見えます。わたくしでしたら、あなたの掛かり付け医よりは保険代理人になりましたですね、モットラムさん」若者は調子を合わせた。

「元気そのもの、そのとおりだ。いいかね、わしだって元気そのものだと感じておる。これ以上は無理ぐらいにな。それが残り二年だと！」

「なんとおっしゃいましたか？」

「二年だよ。そう言っておった。わしが知りたいのは、もし手の施しようがないのなら、わしがそれを知ってなんになるのかということだ。結局、何もできることはない、やつはそう抜かしおった。そのくせ、あれをしろだの、これはやめろだの——」

「申し訳ありませんが、モットラムさん。おっしゃる意味がわかりかねるのですが。あなたの主治医のことですか？」

「そうではない。プルフォードにおけるわしの主治医ははっきりした診断が下せなかった。そこでロンドンの大物医師を紹介したというわけだ。今朝、診てもらってきた。二年と言われたよ。ひどい話だと思わんかね？」

「なるほど……。専門医のところにはいらしたのですか。その、心から残念に思います」若者は真剣に慰めの言葉を述べたが、実のところは、悲しむというよりむしろ戸惑っていた。このいかにも健康そうな、明らかに日々の食事を楽しんでいるように見える赤ら顔の男が、あの世へ行きかけている。そう考えると空恐ろしく、どう反応すればいいのかわからないのだ。日頃の職業意識もどこかへ吹き飛んでしまった。しかしモットラム氏の態度はあくまで事務的だった。

「ふん、残念か！ そうだろうな。あんたにとっちゃ、五十万ポンドを意味するわけだからな、そうだろう？」

「はあ、しかしどうでしょう、専門医というのはよく誤診をするものですよ。いかがです、当社の専属医の診察を受けられては？ 喜んで診させていたたくはずです」

言うまでもなく、インディスタライバブル社にはお抱えの医師がいて、重要な保険は彼の診断を経

てからでないと契約できない決まりになっている。英国でも三本の指に入る腕だという評判で、本来ならハーリー街で開業するはずだったのが、社から法外な報酬額を提示されて断念したという噂である。若者はまったくの親切心から勧めたのだが、モットラム氏はまたも疑念を露にした。自分の健康状態について社が強引に正確な情報を引き出そうとしているように見え、不愉快だったのだ。

「せっかくだが無駄なことだ。もう間違いはないんだから。なんなら、医者^の証明書を提出してもいい。だが、わしがここへ来たのはそんなことを話すためじゃない。取り引きのためだ。あんたはわしが今どんな立場にあるかご存知か？」

若者はモットラム氏の関係書類に目を通したばかりだったので、彼については十分によく知っていた。しかし、ここで通り一遍の返答をしてはならない。顧客を不特定多数の「生命」と見なすのではなく、あくまで個々の人間として考えるのがインデイスクライバブル社の信条なのである。「そうですね——若者は記憶を探るようなふりをした——」あなたはもうすぐ六十三歳になられるはずですからあと二年というとおや、あなたの保険が満期になるかどうか、ぎりぎりのところのようですね」

「そのとおりだ。わしの誕生日は二週間ほど後になる。もしあの医者^の診立てが正確なら、あんた方は五十万ポンド支払わねばならん。もし彼が少しばかり早い日付を言ったのなら、わしには一ポンドも入らず、あんた方は何も支払わんでいい。そういうわけだろう？」

「お気の毒ですが、そのようですね。ご理解いただけるとは思いますが、モットラムさん、こうした場合、当社としては、経験に基づいた手順で処理しなければならぬのです」

「それはわかっておる。しかし、こんなふうに考えてみてくれんか。わしがあの保険に入ったとき、

保険金のことはあまり考えていなかった。身内と言えば甥だけだが、あれはどうもわしに反抗するつもりらしい。だからあれには何も遣らん。もしあの五十万ポンドが入ったら、慈善に回されるだろうわしが強く望んでおつたのは、年金のほうだ。長寿の多い家系なのでな、快適な老後を送るのを楽しみにしておつた。わかるだろう？　ところが、医師が語つたところによれば、もうその機会はないのだ。あの安楽死保険なるものも、わしにとつてかつてほど価値はなくなつた。そこでだな、あんた方に公平な提案をするためにここへ来たというわけだ」

「当社といたしましたは——」若者が言いかけた。

「まあ、最後まで聞きなさい。それからあんたの言い分を言えばいい。わしは世間では金持ちでとつておるし、自分でもそう思う。しかしわしの財産はあんた方が考えるよりずっと自由がきかんのだ。金のやりくりは厳しく、物にしたつて売る気になつたときに売り払えるものでもない。わしがほしいのは現金だ。医者払いやら、外国旅行やら、療養だのなんだのに使う——。そこでひとつ相談がある——わしが掛け金を払い始めたときからの半額を払い戻してもらえないだろうか。半額だよ、え。もしわしが六十五になる前に死んでも、金はいらぬ。つまり、あんた方は保険金を一ポンドも支払わなくていいのだ。六十五より長生きしても、やはり金はいらぬ。あんた方は年金を支払わんですむ。どうだね、これは取り引きだ。この申し出に対してあんた方はどう言いなさる？」

「すみません、まことにお気の毒ですが。これまでにもそのようなお申し出をいただいたことがございません。しかし社の方針といたしまして、最初に交わした契約はいつさい変更できない決まりなのです。わたくしどもも損をすることはございます。ですから、お客様が損をなさるときも、その責任はお客様に負つていただくしかないのです。もし、おっしゃる様にわたくしどもが保険内容の変更な

どいたしましたら、社の信用に傷が付きまゝ。あなたがわたくしどもに好意をお寄せくださっているのは存じております、モットラムさん。寛大なお申し出にも感謝いたします。しかし、それはできない相談というものです。どうかお察してください」

一分近くの間、重苦しい沈黙が流れた。それからモットラム氏は痛ましいほどがっかりした様子で最後の手段を試みた。

「この件を重役たちに取り次いでもらえるだろうね。あんたがこういった申し出を彼らに断りもなく受け容れられないのは当然だ。しかし、次の役員会でこの件を報告してもらえようね、え？」
「もちろん、取り次ぎは必ずいたします。ただ、申し上げにくいのですが、期待はなさらないでください。安楽死保険の掛け金は非常に高額ですので、中途で解約したいというお客様はあとを絶ちません。しかし重役たちが払い戻しに応じたことは一度としてないのです。もしわたくしの助言をお聞き入れくださるなら、モットラムさん、どうかもう一度、別の医師の診断を受け、あと一、二年、養生なさって、あの年金をお楽しみください——どうぞ、幾久しく」所詮、この若者も一介の社員に過ぎない。どちらに転んでも、自分の金が失われるわけではないのだ。

モットラム氏は立ち上がった。勧められた飲み物をすべて断り、やや憔悴した様子で、それでもまっすぐ前を向き、社員の案内で部屋を出ていった。若者はいくつかメモを取った。こうしてインデイスクライパブル社の厳格な業務は続いていく。遙か遠方では、船舶が沈没し、工場に雷が落ち、穀物は虫害で全滅し、野蠻人が平和な地域を襲撃している。病床にある人々は今生の最後の闘いとして、必死に息を吸おうとあがいている。インデイスクライパブル社にとっては、それらすべてがビジネスを意味するのである。しかも、そのほとんどは損害にあたる。だが損害は一瞬たりとも彼らの支払い

能力を脅かすことはない。そこには常に平均の法則が存在するからだ。